

詩星文星

東京外國語
學校教授

水野繁太郎序

新聲社

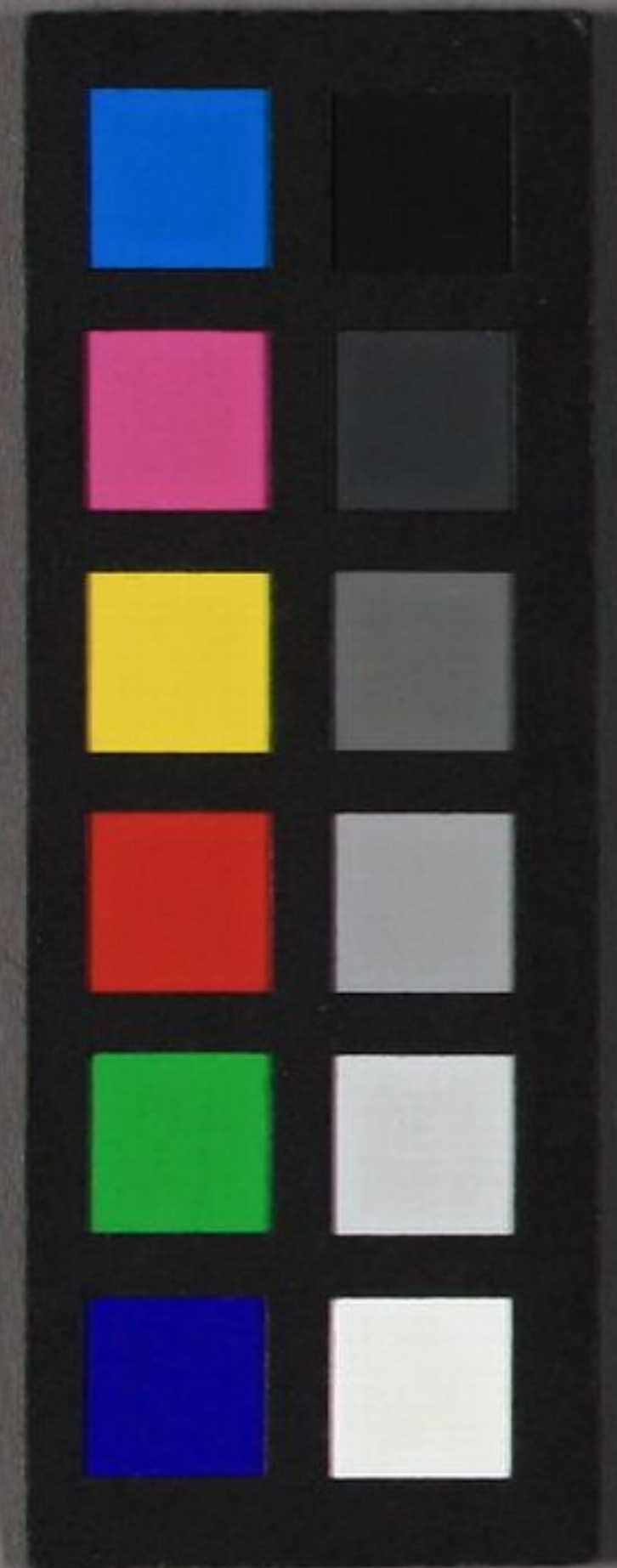
藏版

齋木仙醉
譯 著

掲載目次

理想の花束	ツルゲネフの散文詩	トルストイの豪吟	ヘルデルの寓言	レツシングの諷詩
-------	-----------	----------	---------	----------

通卷四十一篇



新聲出版社

藤生てい子女史著

英文山さくら

文學士尾上柴舟君著

ハインネの詩

文學士淺野馮虛君著

英文評釋

新刊

定價拾八錢
郵稅金四錢

三版

定價貳拾錢
郵稅金四錢

二版

定價貳拾錢
郵稅金四錢

齋木仙醉
著 譯

掲載目次

理想の花束	ツルゲネフの散文詩	トルストイの豪吟	ヘルデルの寓言	レツシングの諷詩
-------	-----------	----------	---------	----------

通卷四十一篇

詩星文星

東京外國語
學校教授

水野繁太郎序

新聲社

藏版

新聲社出版

藤生てい子女史著

英文山さくら

文學士尾上柴舟君著

ハインネの詩

文學士淺野馮虛君著

英文評釋

新刊
定價拾八錢
郵税金四錢

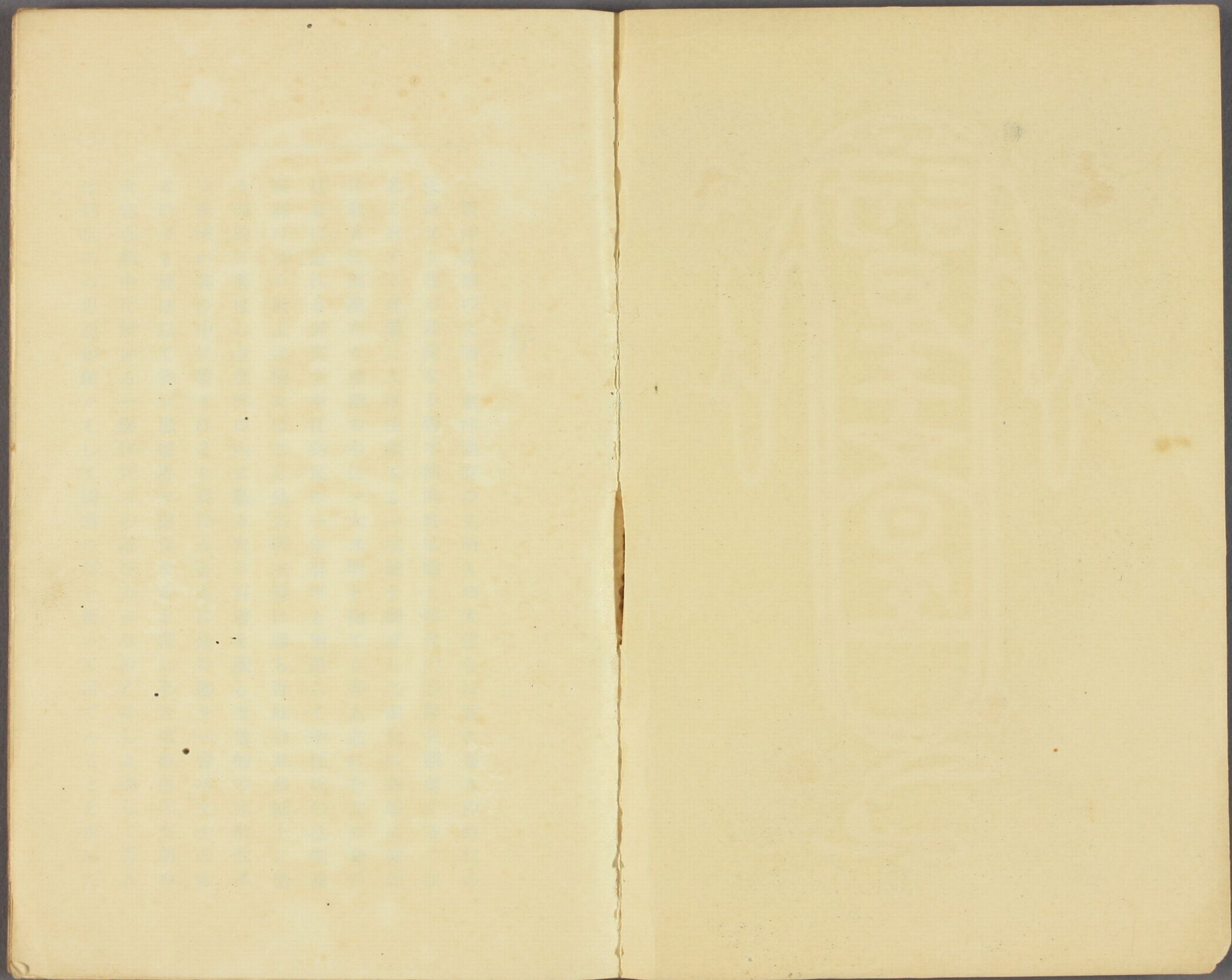
三版
定價貳拾錢
郵税金四錢

二版
定價貳拾錢
郵税金四錢









序

西洋新來の文明と東洋固有の文明との大化合は實に吾人の時代の使命なり、我が親愛なる齋木仙醉君は能く時代の趨勢を觀破するの眼光を有する者、曩に文明主義てふ一主義を創立して宗教に哲學に倫理に教育に混沌たる思潮の中に一大光明を抛てり吾人之れを其の命の且暮に迫れる老文士中江兆民の一年有半と對照して中江氏のは老境寂寞の氣の紙上に横たはるを見、文明主義は即ち青壯の氣象紙上に鳴り詩的に美はしき文辞の中に轟々たる百雷を藏し、光榮的の宗教改革の動機が其の中に籠もれるを視たり、吾人は是の書や一青年文士の作なれども猶ほ以て我が思想界の傑作たるを讚しき、否東西兩洋文明の大化合期中に於ける一傑作たるの値ひあるものとなしき、而して吾人は經世的思想が續々として同君の唇を衝いて出でんことを求めた

りき。獨り抽象的理論の論述を以て人心を動かすに足らずとや思ふからん、果然全君は詩星文星てふ一冊子をものして大いに情操の上に感化を與へんとす、吾人其の譯出せる標題を視るに孰れも趣味津津たるものにして、又之れと同時に其の原作者の性格の最も良く發揮せるものを撰擇したり、吾人は其の標題の撰擇に於ては其の手腕の上乗るを認む、唯だ吾人をして怪訝の念を發せしむるものあり、何ぞや、其の篇中或は戀愛に關せるものあり、或はツルゲテフの如き哲理觀の文明主義の其れと、或は背反するが如きものあるは何ぞや、吾人は誠に一たび之れを怪しみぬ、而かも醜て仙醉君の性格を考ふれば、君は決して小主觀の人にあらず、其の文明主義なるものが進化論に於て、科學を、基督教に於て道義を、佛教に於て哲觀を得、是れを文明主義てふ大主義の中に融和し盡したるが如く、彼は枯禪的の觀念も酒氣をも果た戀愛をも理

想的の大生命の中に融化し去らんとするものにあらずや、想ふにヘルデルの教育的思想は氏が同情同感する處ならん、レツシングの諷詩は君が嚴肅なる批評家なる氏にして斯かる滑稽の詩を作りたるを奇として譯出せるものからん、トルストイの祖國の爲に流せる熱淚、春風麗らかなる其の家庭の和樂は君が大に社會に訓へんとする所あるべし、唯だ其れツルゲテフの哲學的意見に對して君は如何なる感想をか有する、君が之れに對する評言を見ざりしは稍や之を遺憾とす、吾人は期す吾人の希望が他日達せらるゝの日あるを。

君謂ふ、我は此の小冊子を我を三歳の齡より亡き母に代りて養育し、又斯かる薄命の生涯に於て大に樂天的思想を賜はりたる、高恩ある祖母に捧げて紀念とすと、吾人は大に君が優さしき心を多とするものなり、想ふに君が使命と特長は純文學にあらずして、思想上の學說の建設と評論に在るべく、此の小冊子の如きは君に取りては輕々たるものある

(四)

べし而かも尙ほ此の譯書を當世の徒らに文辞を美しくしくして其の表
現せる思想に至りては毫も見るに足らざる所謂我が國の詩歌界に於
ては大に其の理想的なる点に於て異彩を放つものたるを疑はざるな
り、仙醉君獨逸語を余に學びたるの故を以て序を余に請ふ、依つて聊さ
か感想を記して以て序となす。

明治三十五年四月

水野 繁 太郎 識

(五)

序 歌

錢^シ神^シの^シ吼^シけ^リ、^シ喧^シま^シく、
鄭^シ聲^シの^シ響^シき、^シわ^シづ^シら^シは^シし、
あ^シあ^シ忌^シは^シし^シや、^シ忌^シは^シし^シや。
紫、^シ朱^シけ^シを^シ奪^シふ^シ世^シの、
絃^シ歌^シは^シ汚^シれ、^シ童^シ謡^シも、
濁^シり^シぬ^シ沓^シを、^シ洗^シふ^シべ^シく。

あゝ佐保^シ姫^シの、^シか^シざ^シし^シには、
千草^シの^シ花^シの、^シ匂^シひ^シあり、
立田^シの^シ姫^シの、^シ裳^シ裾^シには、

唐紅の、色ふかし、
あゝ敷島の、人の子よ、
などと言靈、咲きおはぬ。

我が敷島の、花紅葉、
それにはあらぬ、とづくにの、
詩星文星、とりくに、
眞玉を石に、化するなる、
わが水莖に、ものすれば、
怪しや猶ほも、光りあり。
視よへルテルの、喩へ草、

諄々たる夫子の、警咳あり、
願解くや、レツシグの諷詩、
理想は句ふ、花の束、
情熱湧くや、トルストイ、
哲理はふかし、ツルゲチフ。

月に董に、はた戀に、
焦れは焦れ、人の子よ、
唯だ涙あれ、國と家に、
一羽の雀も、鳩くすある、
使命を竭くし、白鳥の
浩歌を謠ひて、冥せよや。

詩目次

レツシングの醜詩

- ◎蜜の蜂……………一
- ◎雄辯……………二
- ◎名選み……………三
- ◎奇人……………五
- ◎昨日……………六
- ◎接吻……………七
- ◎老若の興味……………九
- ◎醉詩人……………一一
- ◎うしろ影……………一二
- ◎樂園……………一三

- ◎古酒新酒……………一四
- ◎六日間……………一五

トルストイの豪吟

- ◎祖國……………一八
- ◎追放の囚人……………一九
- ◎黄金の春……………二一
- ◎夏の夜……………二三
- ◎鐘花……………二四

ツルゲチフの散文詩

- ◎雀……………二七

- ◎薔薇……………二九
- ◎巖……………三二
- ◎自然の女神……………三四
- ◎生まれよ！……………三七
- ◎基督……………三八
- ◎露西亞語……………四一

理想の花束

- ◎小川の歌……………ゲーテ……………四三
- ◎奇遇……………同……………四四
- ◎アナクレオンの墓……………同……………四四
- ◎故國を忍ぶミニュオンの歌……………同……………四五
- ◎三人の吟行者……………レーナウ……………四六
- ◎ローレライの歌……………ハイチ……………四七
- ◎蓮の花……………同……………四九

ヘルデルの寓言

- ◎瀕死の白鳥…………………………五三
- ◎白百合と薔薇…………………………五六
- ◎木魂…………………………五九
- ◎「夜」と「晝」…………………………六三
- ◎薔薇…………………………六五
- ◎曙…………………………六七
- ◎花の選み…………………………六九

- ◎歸郷……………シヤミソ……………四九
- ◎堂宇……………ウーランド……………四九
- ◎月と星……………シルレル……………五〇
- ◎萊因の防禦……………シルレル……………五一

詩星文星

齋木仙醉著

レツシングの諷詩

蜜蜂

黄金の春にアモールが、

牧者の樂に耽りつゝ、

千草の花の咲ける野を、

馳せもてゆきしその折に、

甘き蜜をば蓄はへし、

にほへる薔薇の葉隠れに、

黄金の春にアモールが、	一
牧者の樂に耽りつゝ、	二
千草の花の咲ける野を、	三
馳せもてゆきしその折に、	四
甘き蜜をば蓄はへし、	五
にほへる薔薇の葉隠れに、	六

まどろみるたる蜜蜂は、

侏儒ある神を刺しにけり。

蜂に刺されてアモールは、

彌よ伶俐まかしくなりけり。

謀畧たくみ盡きせぬ騙兒くらもは、

新に術をくはだてぬ。

うばら董の香を追ひて、

少女手折りに來し時に、

蜜蜂のおと飛びいで、

馳て少女を刺しにけり。

雄辯

水は唾にするものぞ、

水に泳げる魚に見て、

友よ此の理を悟るべし。

酒は多辯にする者ぞ、

酒宴の卓に鑑がみて、

友よ此の理を悟るべし。

ラインの酒が人々の、

口をば假りて談すとき、

まことに人は辯士なり。

口角沫を飛ばしつゝ、

戒め教へまた駁し、

人の言葉は聴きもせて。

名選み

われ戀人に問ひにけり、

美しき君よ君が名を、

なにとおほせむ我歌に。

花子としてか雅子とか、

清子としてか芳子とか、

なにと傳へむ孫の世に。

笑を含める戀人は、

口を開きて言ひけらく、

あゝ名は唯に響きのみ。

芳子とせむも花子とも、

はた雅子とも意のまゝに、

たゞ汝のと名づけませ。

奇人

誰れも己れに省りみば、

やがて愚人と悟るべし、

さはさりながら他人の、

愚人と彼をそしりなば、

彼は恐れん恐るべし、

謗れる者を恐るべし。

誰れも己れに省りみば、

賢からぬを悟るべし、

さはさりながら他人の、

賢者と彼をたゝへなば、

彼は愛せん愛すべし、

讚めたる者を愛すべし。

我と我が身に省りみて、

我は奇人と悟りたる、

その人々にむかひては、

世のたいかにかに名づくとも、

たゞ其人々に向ひては、

毀譽褒貶ぞひとつなる。

昨日

昨日笑ひし我にして、

けふは悲しむ我なりや、

あすもそ我はうせぬらめ、

さはさりながら我はしも、

けふもあしたも懐かしく、

奇しや昨日を忍ぶかな。

接吻

子等のなほある接吻は、

たゞ戯れにすぎずして、

接吻するも心なく、

受くらん人も感じなし。

我を敬ふ其のために、

なすなる友が接吻は、

こは挨拶のたぐひにて、

もと接吻に屬せざる、

たゞ冷やけき禮儀より、

ものせしみのみの接吻す。

父の給ふる接吻は、

好意よりある接吻ぞ、

子にして父にあげらるゝ、

たゞかしまむの外ぞなき。

姉と妹の接吻は、

宛ら唇のあたゝかく、

他し少女を想ひ得ば、

たゞその限り接吻ぞ。

我が戀人のものしたる、

人目を忍ぶ接吻す、

鳩のに似たる接吻す、

あれよまゝとの接吻す。

老若の興味

讀みては讀みてまた讀まん、

不斷の興味我れにありし。

書きては書きてまた書かん、

不斷の興味我れになし。

思ひて思ひまた思ふ、

不斷の興味我れにありし。

短く言へば絶え間なく、

學ばん興味我れになし。

さはさりながら常々に、

戯ざぶいふ興味我れにあり。

さはさりながら常々に、

戀する興味我れにあり。

さはさりながら常々に、

酒飲む興味我れにあり。

短く言へば常々に、

楽しむ興味我れにあり。

濫りがちある老人よ、

君儕は我をな誤りそ。

君儕はまこと常々に、

貪ぼる興味持たざるや。

君儕はまこと常々に、

教ふる興味持たざるや。

君儕はげにや常々に、

難ずる興味持たざるや。

君儕がなせる事みなは、

みあどる歳の結果なり。

我れがものする事みあは、

みあ青春の求めあり。

我れ心より悦びて、

君儕の樂を許すべし。

君儕は我に我が求む、

その樂しみを許さずや。

醉 詩 人

醉へる詩人のはてもなく、

盃かさね飲み干せば、

友は詩人を戒めて、

止めよ足るほど飲みつれば、
椅子より落つるばかりぞと、

詩人は言ひぬあやまれり、

酒飲みすおす人はあれど、

足るほど飲みし人ぞなき。

うしろ影

見ませわが友彼方をば、

げに美しき手弱女の、

今かしこをば過ぎ行けり、

見ませわが友その姿。

衣あたらしううち揃へ、

途の小石も跨がざる、

小足歩みの品よきに、

鬢の毛多き白き首、

伸びたる胸の細やかに、

若き娘をあざむけり。

いざ我が友よ急ぎゆきて、

あのをみなをば眺めてん、

うしろ姿のたがはずば、

西施嫦娥もなにかせむ。

いざ急げ！あはれ何たる好運ぞ、

をみなは今し顧みぬ、

あゝあゝ我が眼ひきたるは、

若づくりせる老婦なり。

楽園

その幸福を一塊の、

林檎とあえて取り代ふる、

あはれアダムよ浅ましき、

何といふべき嗜好や、

我れ若しアダムに代りあば、

樂園いま尙ほあるべきを、

葡萄の粒の若しされど、

試みの果にありもせば、

然らば如何に我が友よ、

あゝ笑止かれ若しさらば、

樂園最早やあらぬべし。

古酒新酒

あゝ古い人よ君たちは、

若やがんとのたのしみに、

酒くむなれば新酒こそ、

老いたる人の命かれ。

あゝ若者よ君たちは、

老いて賢まくなる爲に、

酒くむなれば古酒こそ、

げにや若者のいのちなれ。

六日間

六日見しりて六日間、

戀ふる女を戀ひてしが、

七日とあれば戀人は、

色青ざめてはかあくも、

世をへだてけり戀人は。

つきぬ嘆きの初まるも、

むさしく我は死におくれ、

我はあほしも生くべきか、

たゞ無情なる草や木に、

等しき生を營あむも、

情と心を稟けし身の、

神よいかでか幸あらん。

あゝ血と温たまりをうつせみの、

此の身よりはや取りてたへ、

泣きつゝ立てる戀人の、

墳墓のまへに死を給へ、

我に齡をたまはりて、

宿禰の齡にとゞくとも、

生かせ給ふもあゝ神よ、

我は何をか悦ばん、

灰色なせる髪をつけ、

墓に入るより我れ寧ろ、

たゞ六日いきその六日、

戀する人を戀してん。

トルストイの豪吟

祖 國

祖國よ我が祖國よ！
 嵐に似たる野馬のかけり、
 蒼空に高き鷺の叫び、
 遙かに響く狼の吼り。
 あゝ快なるかゝ我が祖國よ！
 あゝ汝、漠たる廣野の地よ！
 啾啾たる野鶯の歌、
 あゝ草原、雲、又風！

追放の囚人

日は傾きて照りはゆる、
 草野の中に影消えぬ、
 見よひとつらの囚人の、
 鏈は塵をあほるなり。
 刈りあまれたる頭して、
 喘ぎながらに鏈曳く、
 その眉毛には懼れあり、
 胸に憂をつゝむらん。
 二頭の駑馬が曳きゆくは、
 ろの財あり調度あり、
 老いし二人の護送兵、

倦み疲れつゝ歩むめり

あゝ兄弟よ歌謡ひ、

えばし憂きをば忘れずや、

運命きだめの幸のうすくして、

成ることなみの身なれども、

静めかねたる戀しさと、

悲しさに充ちて謡ひけり、

その儘ならぬ生活と、

領いと廣き草野をば。

荒き自由と母と呼ぶ、

ボルガの川をたゞへたり、

聲は高みぬ日は暮れぬ、

鍵は塵をあほるあり。

黄金の春

いにし黄金の春あれや、

谷も野づらもやうやうに、

みどりの小川音たてし、

空ものどかに風もなく、

あなたこなたに立つ森の、

透きとふばかり見ゆるあり、

曉えらむあろあれば、

牧の童のすさぶなる、

蘆笛はいまだきこえず、

森の芝生はうるはしく、

その葉はいまだ巻きぬめり。

いにし黄金の春ありき、
 芽ぐめる樺の木蔭にて、
 いともせちある我が戀を、
 打ちわけにしよ嘆きつゝ、
 情あるかなわが君は、
 愛のまぼるゝ眼をば、
 眠りてそれとしめしよよ、
 あゝわが若き生命も、
 希望も森も鳥の音も、
 いづれか春のものならぬ。
 泣きつゝ我は美はしき、
 君が面を見まもりぬ、
 嬉しさみちて聲もあく、

芽ぐめる樺の蔭にして、
 これぞ黄金の春なりき、
 あゝ生命も戀愛も、
 月の馨りも日の影も、
 安慰の感も涕涙も、
 いづれか春のものならぬ。

夏の夜

いも眠らぬか戀人よ、
 重ぐるしげに息つけり、
 あゝまとわりよ蚊の群の、
 枕のめぐり鳴きあへり。
 窓に寄りそひ見渡しね、

池と谷とは寂として、

途の砂礫さざれに白かねの、

光を月は投ぐるなり、

夜の衣につままれて、

園は眠れど薄明く、

古き禾場こちばの立つ見えて、

聴け牧場には聲もなし、

いびや静けき部屋にゆき、

眠りと平和見いださん、

我儕が結ぶ佳き夢を、

夜守りの柵な破りそよ。

鐘花

鐘花よ野に生ふる、

いとしき春のうあるらよ、

なれらが鳴らす春の音は、

我が幸福の知らせかよ。

刈りしことなき叢に、

可憐の頭うなづかせ、

青き眼してゆかしげに、

なぐみあ我を眺むるか、

我れ高らかに馬に乗り、

草野をよぎり疾き風の、

ときが如くに駆けゆけば、

蹄はあはれなれを撃ち、

なれをば土に踏みこむる、

鐘花よいろ青き、
わゝ是非もあきわざなれや。

かれはそがため死ぬべきか、

我な恨みろ我いかに、

おれを害あふ意やあらん、

鷺の翼の身にしあらば、

我はあれらに觸れぬなり。

駿馬蹄を鳴らしては、

鑿手綱も制し得ず、

雲とばかりに塵を立て、

颶風ゴウフウのあるゝ如くにて、

遙かかなたへ駈けて行く、

行手は我も語り得ず。

ツルゲネフの散文詩

雀

遊獵よりかへりて、園の並木路をすぎ行けるをりしも、忽ちわれにさ
きだちて走りゐたる獵犬の、何か野獸にても嗅ぎ出したらん様に、身を
伏しめにして、忍びいだしぬ。

並木路を見遣れば、可憐ある子雀の、喙の端黄いろく、頭にうぶくし
き綿毛をいただけるが、そこなる樺の木のはげしき風にいたく揺られ
しかば、巢より落ちて動きも得せて、やう／＼に生へしばかりの翼にて、
かひもなき様に羽たゝきすめり。

俄かに隣れる木より黒き胸したる一羽の親雀、まさしく獵犬の口の
まへに石の落ちきなむ様なる勢ひにて飛び下れり。悲しき泣き聲しなが
ら、惱ましきのためか、我を忘れて、口打ち開き、大きな歯を現はせる獵

犬の怖ろしき喉の方に、一二度飛びかゝらんとせしかば、獵犬は徐ろにそなたに身を構へぬ。

あは親雀のわが子を救はんとして、其身を楯に、其子をかばはんとする。あり、その矮ちひ小こきからだは慄へおのゝき、その聲は荒く嘔がれゆきぬ。あゝ彼は身を抛ち、身を犠牲に供せんとするあり。

あゝの親雀には、獵犬が如何に猛けくしき怪物ともおもはれしならむ。さりとしてかしまなる安全なる枝に止まり、禍を避けんとも欲せざりしが、あゝあやしや、念力よりもひとしほ強き力もて、子雀を救うて奪ひ去りぬ。獵犬は立ち止まりしが、やがて後ずさりしぬ。

獵犬もくしきかの力を認めぬ、我は狼狽せる犬を呼びよせて、畏敬の感にうたれつゝ遠ざかりぬ。

げに笑ひ給ふを、我はあゝの雄々しき心を持てる小鳥に對し、其愛の激しき發動に就きてまゝと畏敬の感に打たれしなり。

思ひ知りぬ、愛はげに死よりも死の苦痛よりもひとしほ強きものなるを、たゞこの愛によりてあゝそ生命は保たれ、また活氣あるものとはなるなれ。

薔 薇

ころは八月のすゑにて秋のけはひは、はや迫れるほどのことなりき。

太陽は地平線下に没して、俄かに烈しく降り來る雨脚……さあれ稲妻も雷も伴はぬが……今しも我儕の地方の空を駆けすぎぬ。

夕焼の熱氣と、降りし雨の流れとに隈なく注がれて、我が宿の庭はほてり、又もやをあげつゝありき。

妻は座敷にてテーブルの側なる椅子にかゝりつゝ、半ば開きし入口を通して、庭の方を見詰めをれり。

我は妻の心の如何に定まりしかを知りぬ、我は妻が此の瞬間に、暫時

なりしかど、いと心苦しき、心の葛藤ののち、其の力とても及ばずと諦らめたる或感情に屈服したるあとを知りぬ。

つと妻は立ち上りて、急ぎ庭に行きしが、廳て姿は見えずなりぬ。

一時間は経過しぬ……二時間も経過せり、妻は歸り來らざるなり。

時に我は立ち上りて、妻の通り往きしと、確かに知れたる並木路の方に向ひて行きぬ。

ぬば玉の暗は周圍を襲ひ居れり、夜は既に暗の衣を垂れぬ……時に

我は庭の面の濕りたる砂の上に、とある圓きものありて、もの皆を蔽ひ

隠せる暗のあかながらも、赤ほ紅に閃めくものあるに氣附きたり。

我はそなたに身をかいむれば、そは若きやうくに花開さしばかり

なる、薔薇なりき、二時間前には、我は其花を妻の胸にて見たりしあり。

我は泥に落ちたる其花を取り上げて、座敷に歸りぬ。かくて、妻の椅子の前なるテーブルの上置きぬ。

その時、遂に妻はかへり來ぬ、輕き歩みをあして、妻は座敷を通りて、テーブルの側によりぬ。

妻の顔色は、青ざめて、又鮮ざやかになりぬ。迅かになにやらん快活なる調子にて、沈みたる云は、ほそめられたる眼を、室内のあちらこちらに、ちらつかせる様、心落ちるぬものあるが如し。

とかくして、妻は、かの薔薇に目をそくげり、妻は薔薇を手に把りてその汚れくづをれたる葉をつくくくと打ち眺め、さて我を仰ぎ見たり……かくて其のあちこちとちらつきし妻の眼は、俄かに止みて、涙の露ぞ閃めきおたる。

「妻よ何を泣くぞ」と、我は問へり。

「あの薔薇を悲しみてよ、見給へ、薔薇のいかに成り果てしかを」

この時我は或意味深きあとを言はんと思ひ附けり。

「御身の涙は、此汚れをもとの如く洗ひ落すべきや」と、我は數おほく言

ひし中に言ひぬ涙は何をも洗ひ落とし得ず唯そを焦すのみ」と妻は答へて、爐の方に向ひて、其花を熾きつくす焔の中に投げこみぬ。

「火は涙よりも尙ほ能く焦す」と妻は勢ひよく叫びぬ、又涙の露にて輝き照りし美はしき眼は、元氣よくさちあるかの如く見えぬ。

我は觀たり、かの薔薇のみならず、妻の風情も、いかにも、焦がれたる態ありしを。

巖

古色蒼然たるかの巖の滄海の岸に蟠まりて、温光熙々たる春の日の潮とき、勢ひよく、押し寄する波浪の其巖に、八面より激して、恰もそを翻弄するが如く、なまめき媚ぶるかの如く、又苔をつけたる巖頭に、水沫の碎けたる玉片の輝くさまなるを激ぐと見ゆる巖を見しよとありや。

巖は、舊の如く蟠まれり……あゝ、されど、其黒ずみたる表面には、ほてる如き、光りある色の、うかぶあるを視る。

其のほてる如き、光りある色は、まがふ方なく、かの溶解したる花崗石の、今しも、凝固しそめて、尙ほ、全面に、焔の、燃ゆる色を、あして、焦がれてありし、遙けきその昔を物語るなり。

恰も、其れに似たるかな、巖にもたとへつべき我が古きころは、先づ頃、千々に、わかき婦人の情緒の波に、襲はれつ……斯くて、若き婦人たちの、なまめかしき嬌態に接しては、既に久しく褪めたる色、いにし昔の焔の名残りの、ほてりあからむを、覚えつ！

其波は再びはねかへすを得たり。されど、其のほてりたる色は、尙ほしも、褪めやらす……あゝ、いたき風の、そを消さんとして、吹き掠めたりしかど！

自然の女神

夢かと思れば、我が身は、穹窿の高き、地下の大廣間の中にありき。隈なく、おなじき明かるさにて、照らせる地下の燈火の光は、大廣間の全面に充てり。

大廣間の中央には、緑色の、襪おほき衣着けし氣高き姫、坐を占めたまへり。姫は、手もて頭をもたげ給ひ、何やらん深き思ひに暮れ給へる様あり。

我は立ちどまろに、此姫の、自然の女神にておはするを知りぬ。我は、さながら、俄かに寒さに遇へる者の如く、畏敬の念の骨にもとほらむ様覺えつ。

我はおづおづ此の姫に近づきて、深く身をかゝめたるのち、さて叫びけらく。

「あゝ我儕が公共の母にてまします君よ、いかにすれば、さは物を案じ給ふらむ、君は、我儕人類の將來の運命を、慮り給ふにや、はた如何にせば、人類を最高の文明に達し得べきか、如何にせば、最大幸福を享けしめ得べきかを慮り給ふにや。」

徐ろに、姫は其黒ずみたる、光ある眼を、我に向け給へり。姫の御唇動くよと見えしが……我は雪崩の響きにも似たる、空を截る様なる凜々しき聲を聴きぬ。

「我が身が何に就きて思ひ案ずるかとの尋ねよな、我が身の思ひ案ずるは、いかにせば、蛙を其敵より一としほ容易すく逃れさすべく、其の足の筋肉にいとしく強き力を與へ得るかど、いふにあるぞかし。侵害と防禦との平均はみだれぬ、こは必ず恢復せではかなふまじ。」

「何と仰せらるゝぞ……さるさゝやかなることにて就きて思ひ案じ給ふとな、我儕人類は、げに御身のえり抜き給ひし卓れたる小供にはあ

「らずや」とされど、我は吃りあがら語れり。

姫は少しく眉を擡めしが、さて

「聞きね、有らゆる受造物は、皆我が身の小供なれば、我が身は皆残らずに一樣に心をつかへば……又一様に、みな残らず我が身がみじんに破滅せん」

されど善……理性……正義と、我は再び吃りぬ。

氷の如き聲にて、姫はいらへり。

「そは人類の言葉ぞよ……我が身は善も悪も孰れをも知らず……人類の理性と云ふもの、我が身には律法にてはあらず……して又、正義とは何のことなりや……我が身は汝に生命を與へたれば、我身は、又それを汝より取りかへして、他の者に與へん……虫けらにも、人類にも……誰にも一樣に……汝も其期の到るまで、自から衛れよ、又我を奇煩はしそ！」

我は、尙ほ何か言ひかへしたしと思ひしが……怪しや、我が周圍ある大地ドロドロと鳴りはためき、又震ひそめぬ……かくて、我は目ざめたり。

止まれよ！

止まれよ！和女を我が今見る儘に其儘に、長へに、我が紀念の中に止まれよ！

和女の唇より、臨終の激したる聲、ほとばしりぬ、和女の眼は輝かずまた光らず、妙ある幸福にて霞めり、あゝ今しも和女は、かの妙なる美、その美のかたに、和女の腕は凱旋したる如く伸ばせるその美を自覺して、心いと涼しく、和女の姿は、また其妙なる美を啓示せる様に見えぬ。

和女の肢體をも蔽ひ、衣のいと小さき襞をだに蔽へる、日の光りよりも赤よゝかに、清らかある光り、あゝそは何たる光りぞや。

波を垂れりる和女の髪を、やさしきいぶきもて、かき亂し給ひしは、いかかる神にておはすらん。

蠟石の様に青白き和女の額には、その神の接吻、尚ほ燃ゆるめり。

あれぞこれ……曇りなきあらはの神秘、詩歌の生命の愛の神秘なる。不滅なるものは、あゝ其處にぞある、其處にぞある！ 他の不滅あるなし……又あるを要せぬなり……此の刹那に和女は不滅あるなり。

この刹那消え去るべし、斯くて、和女は、再び一塊の土にかへるべし……されどあれ、和女にとりてなにかあらん！ 此の刹那に、和女は、超然として立てり。有らゆる無常なるものに、昭然として立てり……此の和女は、かの刹那は永遠へに續くらん！

生まれ！ しかして、我をして、和女の不滅に與からせてよ、和女の永遠へなる美の反射の光りを、我が靈魂に投じてよ！

基督

若かりし頃、いさ、寧ろ尚ほ小供なりし頃、我は賤しげなる村の寺院にて見たる様……乾からび瘦せたる蠟燭の、さながら小さき赤き汚点しみの様に見ゆるが、いたうもの古りたる、聖像の下に立ちてありしを。

小さき虹の色したる大影、蠟燭の孰れをも取りまけり……寺院の中は、小暗く又幽鬱うつむなりき……ひと群れの善男善女、しきりに、我が前に祈りるたり。

清らなるブロードの髪をいたゞけるる農夫らは、時より時に、身を屈め平伏し又立ち上るなり……其態を喩ふれば、夏の風の、徐ろに、うねりゆく波の様に、野の熟りたる穂を過ぎゆくにも似たらんか。

俄かにそびらのかたより、誰やらん、我に向ひて來り、躑つて我が側に立ちぬ。

我は身を振り向けざりしが、しかも直に感じたりき、此の人こそかの
基督なめれと。

感動と好奇心と畏れとは、一度に我を支配しぬ。我は努めて……我が
側なる人を打ち眺めつ。

他の衆人に變りなき顔、其の顔は、まったく他の衆人の顔に變りなし、其
の眼は静かに且つ注意深く、少しく天上の方を眺めり。其唇は閉ぢたれ
ど喰ひしぱりたる様にてはなく、上唇の下唇の上にやすらへるが如く
なり。こはからぬ髯は、もなかにて、左右にわかれたり。其の両の手は、重ね
られたれど動かず、其衣服は他人のと差異ひめあざりき。

思へらく、奈何であれ眞ことの基督にてあり得んや、斯くも質素ある
斯くも全く質素なる人が！ろの筈なし！

我は身を向けかへたり……されど、我があの質素なる人より、我が眼
を振り向けしか向けざるかに、我が心とみに、復び、我が側に基督の佇づ

み給へるを覺えき。

再び我は身に力をこめて……斯くて再び眺めたり、かの以前と同じ
顔を他の衆人の顔と異なるなき顔……見知らぬ容貌あれど、全く人並
ある顔を。

俄かに我は胸苦しうなりしが……聽て、我と我に返りぬ。始めて其時
に我は知りぬ、正しく斯かる容貌……他の衆人の容貌に變りなき顔付
が……これぞ基督の御面影あるあとを。

露西亞語

祖國露西亞の運命に就きて、憂懼の念に堪へえざりし其の日にも、汝
のみぞ、ひとり我が金城鐵壁なる。あゝ汝雄大ある眞摯ある露西亞語
よ！……汝にして若しもあざりせば……我は國內に起りたる百般
の事に關して、憂懼措く能はざるものあらん……あゝされど、斯かる雄

大なる言語の一大國民に、賦與せられざるあとは、あれ有り得るものに
あらず！

理想の花束

小川の歌

ゲーテ

一、清水たゞふるいさゝ川	淀みもあらで急ぎ行く
汝が來し方は何處ぞや	汝が行く末は何處ぞや
汀に立ちてそいろ我	そをいぶかしく思ふ哉
二、小暗き岩の裂目より	流れ出ては水底の
花と苔とを滑り行く	鏡の如き水の面に
青み映るや笑ましげに	天ある母の其の姿
三、見るより浮ぶ潔ぎよき	をさな心に誘はれて
何處ともあく流るなり	流れ流るゝ其はては
岩ほに、我をいざあひし	其呼主やみちびかむ

奇遇

露も求めんあゝろかく
 木蔭にさける草花の
 光をはかつ星のおと
 手折てましと思ほえば
 君が御手に手折られて
 根を掘添へて園生なる
 静けき處えりてはた
 枝また枝と繁みゆき

アナクレオンの墓

うばらは咲きて紅に
 人呼びげなる班鳩と
 あゝ神々がくさくさの

全

我とわが入る森の中
 唯ひと本の立てる見ゆ
 情を含ままみのおと
 花は静かに語りけり
 妾は羨れ果つべしや
 茶の間にしも運びしを
 植ゑかへ遣れば草花は
 花また花と咲き匂ふ

全

桂にからむ青葡萄
 嬉しげに鳴く蟋蟀
 有情を以て飾りしは

如何なる人の墳墓ツツミ乎

春夏秋の折りくを

木枯の冬こんまへに

故國を忍ぶミニユオンの歌

全

君知りますや其の邦を
 蒼きみ空のあなたより
 ミルテ静かに揺れもせず
 君知りますや其の態さまを
 かなたへ妾わがは旅してん。
 君知りますや其の家を
 屋根は柱に休みつゝ
 閃めきなせる廣間居間
 妾を睨つめ呷やかん

アナクレオンの懃ふとか

樂しみおほき詩人よ

丘陵は蔽ひて護りけり

黄金の柚子は熟りたり

風やはらかに吹きくれば、

桂は高くそびえたり、

我が戀ひ慕ふ君と共に

仰ぎ見るべき高殿の、

黄金かゝやき白銀の、

立つ蠟石の其の像は、

悲しき吾子よいましをば、

いかにあだ人のしつるか」と
妾が保護者なき君と共に
君知りますやかのやまと
單むる山路の霧にしも
ほつ峯のあたり古への、
君知りますや其の態を
かなたの旅に連れてたべ。

三人の吟行者

わが小車のなやみつゝ
草地に臥せる三人の
提げ琴手にして其一人
夕日の影につゝまれて
口にくはゆる煙管より

君知りますや此の態を、
かなたへ妾は旅してん。
雲立ち迷ふ山路をば、
騾は路をば求むなり、
龍のやからの棲むといふ、
父ともおもふ君よあゝ、

レ ー ナ ウ

われし砂野をよぎるとき、
吟行者を見たりけり。
聞く人もなく唯獨り、
熱ある歌をかきでけり。
のぼる煙に見とれつゝ、

さしもに廣き樂みを
心地もよげに眠るなる
鼓弓の糸にそよ／＼と
眠れる人のふところに
さけ綻びしつゝれぎに
あだしうき世の僥倖を
彼等は我に告げ、らく
煙ふきねむり物かなで
行手に我はいくたびか
鳶色なせる其顔を

ローレライの歌

一、知らじ吾のかくばかり
忘れもかねて胸に浮く

すべてよそなるいま一人、
残りの伴侶が樹にかけし、
風のいぶきはわたるあり、
いかなる夢かかよふらん。
三人は身をばやつせども、
さげすむ如く見ゆるかき。
「生活もしもつらからば、
三様に世をやはかなまん」
チゴイテルをぞ見かへりし、
黒きちゝれし其髪を

ハイネ

うら悲しくも思ふかを、
昔しがたり予哀れある。

二、涼しき空は曇れども
 傾く夕日かけあげて
 三、くしき巖のそが上に
 黄金のかざり閃めかせ
 四、亂るゝ髪をとく櫛の
 たへなる響こもりつゝ
 五、小舟を漕げる舟人の
 険しき岩に目もふれて
 六、あはれ白波舟人を
 思へば哀れ此の果は

蓮の花

光まばゆき天つ日の
 悩む頭をうな垂れて

流れ静けきライン川、
 峰の頂焦すめり。
 白き少女の佇ずみて、
 黄金の髪を櫛けづる。
 輝やくを持って謳ふ歌、
 魂をも奪ふ調べかな。
 いたくも歌に興じつゝ、
 高きをのみぞ眺むある。
 小舟と共に呑みつらん、
 ロールレルライの歌の業。

同

さらばしさに蓮の花、
 夜の來れるをあこがれぬ。

そのあこがるゝ明月の
 いと親しげに月輪に
 花はほてりつ輝きつ
 戀と戀との嘆きより

歸郷

異國ちがくにさりて遙々と
 旅人感に打たれつゝ
 涙はらく流しつゝ
 あゝ獨乙なる故郷よ
 愛はいたくも多くして
 いつ人生の夕まぐれ
 なが地の上に墓石たて

光をおくり醒まさせば、
 清きおもわを露はせり。
 黙して空を視つむめり、
 香りつ泣きつ顛へつゝ。

シヤミッ

故郷の土に歸り來し
 杖をはあしてひまざづき、
 衣の袖を濕しぬ。
 わが所望ねがひをば斥けて、
 所望は唯にひとつなり。
 疲れて眠つぶるとき、
 とはの眠りの頭おほへ。

堂宇

ウーランド

一、かの丘の上に堂宇あり
 下には牧と泉あり
 二、鐘悲しげに音を送り
 歌はいつしかひそまりて
 三、丘の上にて埋めらるは
 あゝ牧童よ汝れがため

月と星

見渡しひろき大野原
 ねりさまよへるむら羊
 涸れもつきせぬ靈泉の
 牧せとてなる一と群を
 たよりに追ふや紅の
 夕な夕なに群をさえ

静かに谷を見おろせり、
 牧童のうたきこゆなり。
 葬りの歌もの悽し、
 牧童耳をそばだてぬ。
 谷にすさびし人の子ぞ、
 何時かは人の謠ふべき。

シルレル

白金あせるふさ毛して、
 かがめ古りたるおの翁、
 生命の水に老いもせて、
 風雅に曲る角笛の、
 黄金の門に影とほく、
 數へわたせば七折の、

岐路廻りしも宜なりや
 牧場に驅らん途の上
 忠實なる犬は立ちまどひ
 知るや知らずや此群を

萊因之防禦

一、號喊破天響般々
 萊因萊因吾國險
 敬愛祖國泰山安
 二、羽檄貫胸千萬衆
 獨人由來龍虎資
 敬愛祖國泰山安
 三、決士向眦蒼々天
 荒心揮拳爲誓契

迷の羊がげもなし、
 導く翁たすくどて、
 雄々しき牡羊先き驅けぬ、
 知るや知らずや此の牧者。

全

如雷如濤似劔戟
 誰能擲身守川塞
 萊因防備牢如鐵
 義氣橫發眼炯々
 國疆敢防來寇駭
 萊因防備牢如鐵
 戰沒英雄皆下瞰
 萊因傲義魂須止

敬愛祖國泰山安
 四、假令鋒鏑碎吾心
 汝江水滾々不竭
 敬愛祖國泰山安
 五、紅血流濺餘一滴
 一手尙能得支銃
 敬愛祖國泰山安

萊因防備牢如鐵
 汝去勿爲異國屬
 獨國亦富英雄血
 萊因防備牢如鐵
 孤腕尙拔三尺劍
 何使敵騎蹂汝汀
 萊因防備牢如鐵

ヘルデルの寓言

瀕死の白鳥

「あはれ、あはれ、我のみや、噫沈黙せる、謠ふことを得ざる、鳥なるか。あはれ、果敢なき運命かな」と嘆きつゝ、獨り落莫たる孤影を吊する白鳥一羽、波に沈まんと夕暉の燦爛たるが中に其身を浴せり。あゝ千萬翼ある者は衆し、翼あるものは、さるをさるを、殆ど、我のみや獨り！さはいへ、我も名鳥——品位ある鳥、鳴かずとて、謠はずとて、喧ましき雜鳥どもの擧に倣はんや、嘈々たり闇々たる、鶯や、鷄や、はた、孔雀や、あや喧ましや、賤し賤し、我鳴かずとて謠はずとて、あどてあどて、彼等の聲を羨やまんや、されど、汝に、あゝ汝に、しめやかなる鶯よ！閉關たる汝の妙音を聽くとき、足に暇なき水鳥の我が足なみも、恍惚として、汝の調べを樂しまんが爲に、緩くあれり、斯からんとき、われ汝の聲を羨みしむと奈何許りありしぞ。あ

はれ黄金色ある夕暉よ、汝を！あゝ汝を謠ひ、汝の燦爛たる光を謠ひ、また我が清福を謠ひて、薔薇色に染められたるかの森々たる水の鏡におゝその中に水を潜つてうせまほし死なまほしと思ひては思ひ、思ひては思ひし其の願は、我が肝膽に徹するばかりぞ！

寂たるかな、寂たるかな、涅槃の常樂か、あゝ白鳥よ、白鳥よ、歡に堪へずてか、汝、白浪を潜る、あゝ清し、總て潔し、白浪に洗はれし汝の姿、汝の清き姿の、再び現はれし時、燦爛たる姿ありて、見よ、彼處の岸に立ちて、あゝ汝を誘ふなり。あはれ、あは、朝陽夕暉の神あり、美しきペーブスあり。聽け白鳥よ、ペーブスは宣へり、温雅、愛すべきの名鳥よ、汝の日頃の祈願、遠く雲井の空に達せざるには、あらねども、時節到來せざりしなり、今ぞ白鳥よ、汝の沈黙せる胸に、鬱勃たる日頃の祈願、許されたるぞ、聽かれしぞ。見よ、此言葉未だ終らざる中に、ペーブスは、其の堅琴もて白鳥に觸れ、永劫不滅の神曲の響は、斯くぞ、斯くぞとて、白鳥に聽かしめ給ひけり。靈妙なる

響は、アポロの使しめなる鳥の總身に泌みわたれり。鼓舞せられたる白鳥は、美の神靈の靈絃にて、あゝ、あゝ、魂も身も溶けよとばかり、力罩めて、灼々たる美はしき太陽と、金波燦爛たる其の海と、高潔無垢の其生命とを感謝しつゝ、歡びに咽びつゝ、謠ひたり、謠ひたり。其姿の天品にして、清雅優悠を極むるが如く、其謠や、嚙腕として、聲調の圓滿なるを見る。あゝ、翕然たり、純如たり、儼如たる白鳥の謠、今や釋如たり。釋如として、沈々たる波浪の搖曳するが如く、樂しき、されど、眠れるが如き響となりて、餘韻遠き謠の搖曳の中に謠ひ續きて、あゝ、終に白鳥が光灼々たるエリジエームにてアポロの神鳥たる天美の姿にて、アポロの足下に俯れ伏して、自らを見出ししまで響きぬ。生涯曾て謠はず、謠へば是れ瀕死の時、あゝ、汝、白鳥の謠よ、されば、汝の謠は、瀕死の時なる謠と稱へられん、あとわりや、其の瀕死の謠辭、世の謠の四肢五躰をも溶くの概あることよ。あゝ、然れども何の遺憾かあらん、汝は既に不滅の響を聽けり、神靈の靈体を視

たり、斯くて白鳥は感謝の念に咽びつゝ、アポロの足に纏はれり。而して其の神曲を聴けり。恰かも、此時、其の貞潔ある妻なる白鳥また茲に來れり。彼れは其夫の先没をなげきなげきて想夫戀の歌を其辞世として遂に茲に來れるなり。高潔無垢ある女神は、この好配偶の二人を其寵愛の奴婢とせり。然れば、この女神が、若やぎの海に浴し給ふの折り、あの雌雄の白鳥の、其貝殻にて成れる美はしき玉輦の側に侍べるを見る。

嗚呼、靜かにして、希望に充つる心を持てる者よ、汝忍べよ、あゝ耐へよ、瞑目せざるの前、汝が成すの力なく、また、汝に成すよとの許されざりしおとも、死の瞬間にぞ、瞑目の瞬間にぞ、汝之れを成すの力を得べし。

白百合と薔薇

いざ言問はん、荒き黒き地より生まれたる婀娜やかある娘らよ、汝等にその美はしき姿を給ひしは誰ぞ。まことや、妙なる指の技工わざとこそ見

ゆれ。如何なるさゝやかなる精か、汝等の萼より立ちのぼりけん。また女神たちが、汝等の葉の上に動じ給へるをり、如何ならん樂しみの感をか覺えつる。語らずや、平和ある花のやからよ、あゝ、かばかり幾重となく紡ぎ、かばかり幾重となく飾り縫箔し給へる、その妙なる花衣を織りなし給ふに、女神たちは、如何にその心悅ばしき仕事をわかち擔ひて、成し給ひ、また、その仕事をしめし合せて、相助け給ひつるぞ！

あゝ心やさしき娘らよ、されど、汝等は黙してたゞ惠さはなる天賦の生をたのしみあへり、いざさらば、汝等の口が黙する處を語り教ふる諭へ草を我に教へんかな。

遼遠の昔、地球の未だ赤裸々たる巖石のさましてありしをり、見よニユンフニの怡ばしげなるひと群、うぶくしき軟らかある土をはこびて、臙て、婉婉たる精たちは、赤裸々たる巖石に花を生ひしめんと企て、種々にその業務は、分たれたり。まだきにも白雪のもと、冷めたき小草の

裡にて。謙遜ある「忍耐」の精は、そのわざを始めて隠るへる輩を織りぬ。希望の精、これに踵ぎて至り、涼しき香りもて鮮やかからしむる玉簪花の小さき夢を充たしぬ。

今し、色濃きうつくしき精の驕りときめける群こそ來りけれ。鬱金香は、その首をあげ、ナルキツセーは、その眼の秋波をあたり投げぬ。

衆人の他の女神達ニエンフェーたちは、その造りなせる者の愛でたさにあゝろ奪はれつゝ皆おのがじい千々に地球を飾れる。

視よ、斯くて、精たちのわざおほかたとのひて、見榮えある様にあり、精たち怡びあへるをりしも、ヴェマス女神三人姉妹なる「雅美」の精たちに曰ひける様、如何なれば、御身たちは、ためらふにか。愛嬌より生まれし姉妹よ、いざ立ちて、その嬋娟よりして、ろ眼に見ゆる途には、しをるべき花を織りなしぬ。三人の姉妹は、仰のまゝに地下に下りぬ。斯くて、アグラヤとて「無垢」の精は、白百合の花を造り、タリヤとオイフロジエの精は

姉妹の手いと睦まじく働らかせて「喜悅」と「愛」との花ある、即ち花中の處女にも喩ふべき薔薇を織りぬ。

野に生ふる、また園に生ふる種々の花は、皆かたみに嫉みあへり。されど、白百合と薔薇とは、誰をも嫉まず、却つて他より嫉まるゝことあるのみ。睦まじげに、彼等は、俱にホーラの一つの野に花咲きて、かたみに飾りあへり。そは、姉妹なる「雅美」が、離れぬやう織りあしたればぞ。

あゝ、處女たちよ、汝等が兩頬にも白百合と薔薇とは花咲きぬれば、希くは、汝等が寵愛者なる「無垢」「喜悅」「慈愛」の精たちをも皆な相共に汝等の上に住ませなむかし。

木 魂

信ぜずや、心すなほなる小供等よ。詩人の寓言にいふらん様に、かの「木魂」は、ろの昔し美はしかりし郎、ナルキソスに其戀を口説きし女にて、女

神の中の饒舌なる一人なりしとのおとを信ぜずや。まゝとや「木魂」はかつて人の子らには、其姿を現はさず、またかつて彼より言葉を掛くることなし、そはとまれ小供らよ、わが之より語る木魂に就きての眞ことの物語を聽きぬ。

「調和」とて愛の娘にておはすがありけり、こはユピテルが森羅萬象を創造し給ひしをり、いとかひくしく働らき給ひし助手の君ありき。この君母の慈しみもて生成し行くなる悉皆の萬物に、その内部に徹して響き、その全体を統べ合はし、またそを有らゆる他の密着せる柄のものと結ぶ様なる、音響を賦し給ひしが、斯くて終ひにその慈しみ深き母君もそを賦し竭し給ひぬ。而かして、その母君は、其生れ唯だ半ばのみ不死ある者にておはせしかば、今や生きながらに、其子供達と別れては、かなはずなり給ひぬ。離別の刹那、いよ／＼迫れり。この時、ねぎふとしつゝ、この母君は、ユピテルの高み座の前にひれ伏し給ひて、曰ひ給ふ様、いと力

強き大神よ、妾の姿を神々の中に消ぬしめ給ひぬ、されど、妾が心妾が感覺は毀ぼ、たゞ残し給はれかし。また妾の心より存在を與へたる、かの小供らよりわかち給ひそ、少くとも冥々の中に妾は小供らの環りにありて、苦しみの聲はた悦ぶびの聲何にても、彼等が賦與されたる運命のまに／＼に發する聲を、妾も全情もてその快苦をわきまへんとす思ふなる。大神語り給はく「汝眼に見ざる彼等の哀れを感じ、また、彼等を保護するゑと能はずして、また如何にすれども、彼等に姿を現はすの力あくば、何のかひかあらん、何となれば最後のことは取り回へしつかさる運命の宣告なれば。」

さらば、妾をして、唯彼等に答ふことを得しめ給ひぬ。唯眼に見えず彼等の心の響を繰り返すゑとを能はしめ給ひぬ。さらば、妾の母も心を慰さまん。

ユピテルは、み手をはたと、この母君に觸れ給へば、やがて其姿は掻き

消したる様になりて、何處にも擴がれる「木魂」とあり給ひぬ。その小供等の聲の響く何處にも、母君の心響き反へし給ふ。萬物の孰れもまたはその密着なるものより悦びくるしみの聲を、之れに和して、調和せる糸の全む音もて、母君は其の心を語りたまふ、牢乎として堅き巖の中にも徹して、母君はそこにこもり給へり。また、さびしき森にも、あの母君籠もりませば、森に命ある心地する。あゝ幾度としも亦く、慈しみ深き母君よ、淋しさと寂として聲なき森の中に潜み給へる母君よ、御身は我を慰さめ爽やかならしめ給へること、いかでか、その胸や頭に全情の響を發せざる様なる冷酷の人間らの荒れすさまじき團欒の及ふべき處ならん。御身はもの静かある全情をもて我に嘆息を反へし響かせ給ふ。されば、我よし世に捨てられ知られざることのありとも、我は御身より來る響をよすがとして、有らゆるものに徹し、有らゆるものを結び給へる母君の我を認め給ひ、我が嘆きを聽き給ふことを頼まん。

夜と晝

「夜」と「晝」と、かたみに、孰れか、その形優れるかを争ひけるが、活々と耀やける童子なる「晝」は、口論し初めて曰く。

「憐れなる暗き母よ、御身は我が有てる太陽のおとき、蒼天の如き、碧河の如き、はた活潑に生せる生命の如き何物を持てりや。我は御身が死せしめし者と呼び醒まし、新たに存在の自覺を與ふ。また何にても御身が睡らせしものを我は煽ほり起あすなり」謙遜なる面色せる「夜」は答へて曰く。

「されど、人は常に汝のおほり立つるを感謝すべきか、おはいと疑はし。汝が疲らせたるものを妾は慰はせ、爽やかならしめでは適はぬにあらざや。殊に慰はすと謂ひ、爽やかにするにも他に術なし、汝を忘れしむること由りてのみ成し得るにあらざや。おれに反して、神々と人間と

の生母なる妾は、妾が生みし總ての者を、皆おのがじゝ満足せしめつゝ、
 予妾が懐に収むるなる。斯くて、彼等みな妾の衣の裾に僅か觸るゝや否
 や彼等は汝の眩術を忘れはて、徐ろにその頭をうか垂るゝ時、妾は安
 靜にゐれる靈魂を高揚し、はた、天つ露もて霑すなり。汝の光のまばゆさ
 に天を眺め遣ることかなはざりし眼に、妾、即ち、一切萬物を蔽ふ夜は、却
 つて數元盡し得ざる太陽や、無數の像や、新らしき希望や、新らしき星を
 あばくなり」

斯くと語れる語の下に、饒舌家ある太陽は、夜の衣の裾に觸れしかば、
 見よ、流石夫子自身も黙しつ疲れつして、物皆を包む夜の懐に入りぬ。其
 れにひきかへ「夜」は燦々たる星を冠り、星の外套を着けて、永遠の静けき
 容子にて座せり。

薔
薇

「妾を環れる千草の花は、あべて皆つひには枯れ果つるものを、如何な
 れば、人の常に妾をのみぞ、まほみがちなる薔薇よ、移ろひ易き薔薇よと
 やたどふらん。あはれ、感謝を知らざる人間かな。果敢なく短かき露の命
 とはいへ、そが間は、汝等に十分の慰樂を竭したるにあらずや、否、妾が死
 せる後にすらも、猶ほ芳ばしき馨と藥劑と、油の清涼にして力を與ふる
 墳墓を汝等にしつらへずや。あゝさるを、如何なれば、妾は常に人の歌ひ、ま
 たは語るを聴くならん、あはれまほみがちなる薔薇よ、移ろひ易き薔薇
 よ」と。

玉座の上なる花の女王は、斯くなげき恨み給ひぬ。あゝ恐らくは是れ
 女王の君のまだきにも、其の美のおとろへゆくを感じそめ給ひし程の
 ことゝんぬり、薔薇の側に處女立てり、この嘆きを聴きてさて謂ふやう、

可憐なる君よ、さな我等を憤りそ、人間のふかき愛をしも思知らずとな
恨み給ひそ、斯く歌ひ斯く語るは、皆君を最負するほどに愛すればぞよ。
我等の眼、いかで、千々さの花のなべて枯れ果つるを見ざらん、われら、こ
れを見て、こは花てふ者の運命予もと、詮なく思ひ諦むるになむ、されど
花の女王なる君を、君をばかりは不死あれかしと願ひもし、また不死あ
るの値あるものとは思ふなり、されば、我等、その願のあだなるを見るに
つけて、君をなげくの中に、深き我等の遺憾を予漏らすある、人間はその
有らゆる美、若やぎ、または悦びを君にこそ、たくらぶるなれ。さらば君の
うつろひ給ふ如く、此等のものみな移ろふるからに、我等はそをなげき
て、斯くは常に歌ひ、または語るあり。あはれまほみがちなる薔薇よ、移ろ
ひ易き薔薇よ」と。

曙

「曙」かつて神々の團欒にて、妾は人の子らにかばかりさはに讃めたく
へられつゝも、また彼等に少なくとも彼等の中、最も妾を讃めたくふる
人らに、かばかり僅か愛せられ訪ふはるゝまとの、いとうたてしや」と、嘆
き給へば「智識」の女神、曰ひ給ふ様。

「御身の運命をさあ愁ひ給ひそ、妾は愁ふべきものとしも覺えず、何故
とや御身をゆるかせにするものを見給ひね、御身若し彼等をよぎり行
き給ふ時に、彼等が、如何ある情婦と御身とを取り交ふるかを見給へ、如
何に彼等が「泥酔」の腕を枕にして横たはりて、その肉體をも精神をもけ
がすやを見給へ。

まこと、御身は、友とすべき者をも、崇拜者をも、有ら給はずとや、否なさに
あらず、萬物は、みち御身をまよとほぎ、千草の花は醒めて御身の唐紅の

耀やきもて装ほひて、美はしきこと、花嫁の様なる、また鳥の群は、御身を
 歡びむかへ斯くても、の皆きは、新たなるたくみをあして、之に由りて白
 駒の様にかけ去る御身の現在を樂しまんとぞ競へる、勤勉ある農夫は、
 た、能く勞働する賢きものは決して御身をゆるかせにせじ、見よ、彼等は、
 御身が給ふなる健康と元氣と安靜と生命との盃より飲める彼等は、か
 の泥酔せる愚者のさわがしき群に妨たげられずして、御身の賜物を受
 くるあとを得るが故に、重ね々悦あべり、御身は、神聖を瀆さるゝあと
 莫くして、樂しまれ、また愛せらるゝを、幸ひと思し給はずや、げにされ
 そ、神々や人の子らとの間の最高の幸なりけれ

「曙」は思慮なく嘆きしことのはづかしさに、顔に紅をそゝぎぬ、無垢潔
 白なるあとに就きて「曙」と全じき他の美はしき女神たちは、皆「曙」の幸を
 ぞ羨みける。

花の選み

大神ユピテル、其の創造せんとする衆くの受造物を、彼等の理想的の
 姿にて呼び寄せんとて招き給へば、其の招きに應じて、衆くの現はれし
 者の中に、華美あるフロラ、また交れり。あゝ誰か能くその嬋娟たる美は
 しき姿をしるし得んや、見よ、母なる大地が、曾てその胎より生みたる千
 々の花の姿も、その體格も、その色も、そのよそほひも、みなこの中におも
 れり。有らゆる神々は、フロラを眺めり。有らゆる女神は、その美をねたく
 思へり。

ユピテル宣はく「神々と精たちのこの數さはある群より、汝が戀人を
 選みね、されど、婀娜なる女よ、その選みを誤まらぬ様こゝろせよ」

フロラは、うか／＼として、周圍を見まはせり。あゝ、フロラにして、若し
 フロラに對し、戀にあまがれつゝあるペーパスを撰みたらむには如何

によかりしならん。されど、ペーブスの美は、この少女には、あまりに氣高くして、その愛を求むること難かりけん。プロラの眼は、あわたしく、あなたこなたに走れり、かくてプロラはえらべり、誰か、おもひきや數多き神々の末班にある一人なるあゝろあわたしくしきチエピユール風の神なりけり。

父神は語れり、あゝ心なのことよ、汝の種屬は、その精神的なる原の姿に於て、まだきにも、氣高きものと、靜かなる愛とに交ふるに、かのなまめきたる人目につき易き美を選びしか、(ペーブスに目くばせしつゝ) 汝若し彼を選びしならんには、汝も、汝の種屬も、彼と共に不死の性を頽かちたらんものを、されど、今は詮なし、汝の夫をうけよ。

チエピユールは、フロラを擁だけり。斯くてフロラは、姿を消しぬ。フロラは花粉となりて、風の神の領を追ひ行きぬ。

エピテル、ろの創造せんと意匠したる萬物の、未だ理想的の姿にてあるを、愈よ具體的なる現實の者とせんとし、母なる大地は、まき撒られたる花の芽を生ひしめんとて、横たはれる時、其戀人の灰を超えてまどろみ、あたるチエピユールに對ひて、エピテル聲高く曰ひ給ひける様、いざあゝ若者よ、いざ立ちて、汝の戀人をもたらして、其地上の姿を眺めよ」とチエピユールは、花粉と共に來りぬ、花粉とは、先きに大地を超えて遙か彼方に飛びたる花粉なり。ペーブスは昔ながらの友誼より蒼を生きづけぬ。泉または河流の女神たち、同胞的の愛に惹かれて、蒼に流れ滲みぬ。チエピユールまたそをいだけり。斯くてフロラは、千々に咲きいでし花となりて顯はれぬ。

あゝ天上の戀人に再び遇へる花の姫たちの悦びや、そも如何ばかりぞよ。花の姫たちは、みな其の戀人の嬉戯するが如き接吻と靜かに擁する両の腕に、其身を委たねしも、げにあとわりなり。あゝされど華胥の夢のまだきに破れ易きかな、見よ悦びは、短かりき。姫たち、其懷を開きて

複郁たる佳香と恍惚たらしむるの色の限りをつくして、幾千代契る合襟の契りの床を展べぬれば、男心と秋の空とかこちし歌もあだならで、世はまだうらゝけき春にして、秋ならなくに、まだきにも、もの飽きなせるチエユピールは、義理も情もあらずに、跡白波と去にけり。慈悲心あつく全情のいと温かきペーパスは名さへフロラのうか／＼と餘り心のすなほにて、それとは知らず、實意なき戀の失意に陥れる哀れの姿憐みて、戀失しうつ脱けの味なき世に、命をばおくらしむるに得耐へてや、物皆焦し滅ぼす光を投げて、悲なしめる、フロラの憂さを縮めけり。
あゝ處女らよ、あの物語りは、古へのみの事ならで、春また春と新らたにぞ全じ歴史を繰り返へすあるぞ花顔柳腰の婀娜なる御身らの姿なか／＼フロラにもまた比ぶべし。戒む、汝等處女たちよ、忘れても、決してチエピエールの如き輕薄ある配偶をば選み給ひそよ。

詩星文星完

明治三十五年五月十二日印刷
明治三十五年五月十五日發行

定價金 拾五錢

不許複製

編輯兼發行者 佐藤儀助

東京市神田區錦町二丁目三番地

印刷者 池田良藏

東京市神田區錦町二丁目三番地

印刷所 新聲社印刷部

發行所

東京市神田區錦町二丁目
電話本局二八五二番

新聲社

新刊廣告

幸田露伴序
國府犀東著
花籃集
價二十錢
郵稅四錢

鏡花、風葉
花袋三君著
花吹雪
價三十錢
郵稅四錢

水野繁太郎序
齋木仙醉著
詩星文星
價十五錢
郵稅二錢

正岡藝陽著
英雄主義
價廿五錢
郵稅四錢

藤生てい子著
山さくら
價十八錢
郵稅四錢

石原和三郎
一條成美著
黑板畫譜
價廿五錢
郵稅四錢

旬上月五至 ○ 旬下月四自

新刊廣告

田山花袋作
渡邊香涯畫
重右衛門の最後
價十八錢
郵稅四錢

金風、有美
犀東外四氏
現代百人豪 第二
價廿五錢
郵稅四錢

柳汀、梅溪執
藝陽、醉夢筆
青年叢話 下卷
價十五錢
郵稅二錢

柳川春葉作
酒中花
價十八錢

鈴木秋子作
薄命怨
未定

佐藤紅綠著
俳句新註
未定

旬上月五至旬下月四自

近刊

近刊

海外
騷壇

海外文壇の近況を知らんとせば、文藝
雜誌「新聲」を見よ、稻門の秀才正宗白鳥
子、燃犀の眼と、流麗の筆とを以て、每號
之を傳へて、文藝の士をして益する所
少なからざらしむ。

新聲は毎月一回發行す、一部十二錢 郵税一錢